

施設での「スタンダードプリコーション」入門

すべての相手が、なにかの病原体をもっていることを前提に

あらかじめ対応を用意しておけば安全、安心です。

その考え方と、具体的な対応の仕方をご紹介します。

だれでもが感染源をもっていると 仮定して対応する考え方、 それがスタンダードプリコーション

近年、福祉施設の利用者も基礎疾患をかかえることが多くなっています。さまざまな感染症に対するつき合いがたも、幅広い病原体に対応することが必要になってきました。

感染を防ぐにはどうするか、その根本になる原則は20世紀末に大きく変貌しています。

旧来の予防方法は、だれがどのような病原体を持っているかをあらかじめ把握しておいて、そのひとに対応するときだけ、特別に配慮すればよい、というものでした。たとえば手袋をするのも感染者に対するときだけでよいと考えられていました。しかし、HIVや肝炎ウイルス、SAARSなど新種の病原体がとめどもなく発見され、いったいだれがどんな病原体をもっているのかを確実に知ることは、とてもできそうにないのがわかってきました。

すべてのひとにすべての病原体の有無を調べてから感染対策をしようとする、時間と費用が膨大なものになります。そもそも、感染初期には病原体に対する抗体が検出されなかったりして、病原体がいるのか、いないのか間違いなく知ることなどできません。

また、HIVの検査には本人の同意が必要ですし、肝炎の検査もHIVの検査も結果が出るまでに時間がかかるということもあります。未知の病原体だってきっとあることでしょう。

むしろ、血液やその他の体液、汗以外の分泌物をだれのものであるにせよ、すべて感染性をもつものと仮定して、すべてのひとに分け隔てなく対応すべきだということになりました。また、粘膜や傷のある皮膚に触れるときには、血液に対するのと同じ注意をはらうことにしました。

これが、1996年に米国のCDC（疾病管理予防センター）から発表されたスタンダードプリコーション（標準予防策）です。

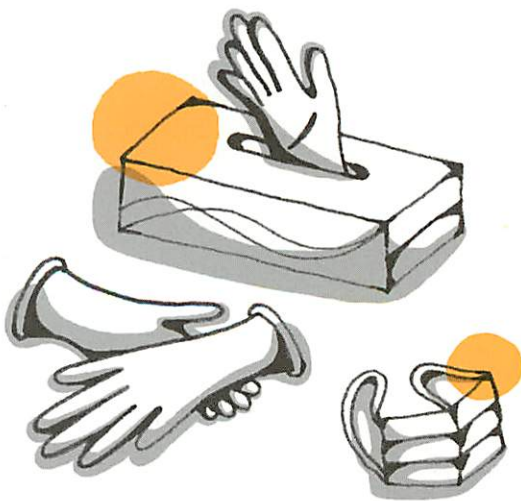
感染源を伝播させず 同時に自分を守るのが スタンダードプリコーション

スタンダードプリコーションでは、まず感染をひとからひとへ伝播してしまうのが職員の手であることから、「手洗い」「手や指の消毒」が大原則であると強調されました。

次に、感染源になるかもしれないもの（血液やその汚染物）に対する処置をするときには、職員の安全のために手袋、マスク、ガウンなどの防御用具を必要に応じて着用することです。

そして、周囲環境対策として、器具の消毒を適正にすることや、使用後のリネン類は感染・非感染の区別をせずすべて汚染物としてあつかい、他の患者や環境を汚染しないように移送・処理することが規定されました。

では、次のページから、施設のケアの現場で実践される具体的な方法をご紹介します。



感染源を伝播させるのは「手」。 セッケンによる手洗いと、 手指の健康保持が大切

手洗い

感染対策の基本は一に手洗い、二に手洗い、三に手洗い、と言われます。

介護者の手を介して、感染者の病原体を非感染者へ広げてしまい、施設の多くの人びとを感染にまきこんでしまうことがあります。病院での院内感染は、このようにして起こります。同じように、施設の場合にも職員の手を介して感染が拡大します。

例を挙げてみましょう。毎年、冬になると問題になるノロウイルスについてはご存知と思います。1日に何十回も水のような下痢を自ら経験されたことがあるかたもあるはずです。よくあるウイルス性の食中毒ですが、高齢者がかかって脱水状態になると点滴で早めに対応しないと重症になることがあります。

ノロウイルスの伝播のすくなくとも一部は、職員の手を介して起こると考えられます。介護場面のそれぞれの場面の前と後に、セッケンで手を洗うことで、手についたノロウイルスを洗い落とすことができます。ノロウイルスのついた手で食事をすれば、ご自身も感染してしまいます。セッケンでの手洗いが、自分を守ると同時に病原体を施設に広げないようにするための最良の方法であるわけです。

こんな一般常識が介護のプロの感染対策で特に強調されるのは、意外に手洗いはおろそかにされがちであるからです。

アルコールによる消毒は、ほとんどの細菌に対して有効で、わざわざ水道までいかなくて済むことから病院で頻用されますが、弱点も持っています。ノロウイルスにはアルコール消毒が効きません。その意味ではセッケンでの手洗いのほうが応用範囲が広いといえます。

手を洗った後、せっかく洗った手をつるしのタオルでふいたのでは、元も子もありません。つるしのタオルは病原体のかたまりです。ペーパータオルを使い捨てにするか、エアタオル利用をお勧めします。



手の健康を保つ

手の健康を保つことも重要な課題です。なによりも手にケガや手あれ、ささくれ、深爪があると、感染性のある血液や体液に不注意に触れたときに、ご自身に感染を起こしてしまう危険があります。

感染性のあるものを扱うときには、手袋をするのが原則ですが、万が一、素手で触れてしまっても、健康な手であればセッケンで洗うだけで済みます。

手あれのもうひとつの側面として、ある種の病原体、とくにブドウ球菌などが手あれのある皮膚に住みついてしまうことがあります。その場合に病原体を広げる源になってしまうことも考えられます。

手洗いや手袋着用を忠実に実行すれば、かえって手あれをおこすこともありますね。ハンドローションを用いた手のお手入れを励行してください。

手指の消毒薬剤としては、効果の高さと手あれが比較的少ないことから、アルコールに保湿剤を加えたものがよく使用されます。ノロウイルスやクロストリジウムディフィシル(※)など、アルコール消毒が効かない病原体がいない（無視できる）忙しい現場では、アルコール擦過剤を使用することがもっともお勧めでしょう。通常の細菌やアルコールに弱いタイプのウイルスであれば、それらの伝播を抑えるのに非常に有効です。

(※) クロストリジウムディフィシル：抗生物質の使用がきっかけとなって発症する大腸炎の原因となる細菌で、芽胞という消毒の困難な形態をもつ。

standard
標準的な
precaution
予防

Standard

使い捨て手袋の使用と 物品を個別化することで 他人への伝播は防げます

使い捨て手袋

使い捨て手袋は、スタンダードプリコーションでの必需品です。血液や体液を取り扱うすべての場面で手袋を使う必要があります。

第1の目的は介護者自身の安全確保です。血液や体液を扱うすべての場合に手袋をすることを常識にすることで、感染事故を起こりにくくすることができます。しびんや便器の排泄物を捨てる時、オムツのケアを行なう時、失禁しているひとの体をふく時、褥瘡の手当てをする時、口腔ケアをする時、生理の介護、痰の吸引、胃瘻や人工肛門の処置、傷口の軟膏をぬるときなど、すべて手袋を着用すべきなのです。

着用後の手袋を取り外す際には、手袋の汚れた面に素手で触れないように注意して、ゴミ箱に捨てます。

第2の目的は、病原体のひとからひとへの伝播の防止です。たとえばノロウイルス感染者のオムツケアをする場合に、介護の場面ごとに手袋を替えることで、次のひとにウイルス性腸炎が伝播する確率を減らすことができます。しかし、手洗いかのわりになるものではないことは銘記すべきです。手袋をする前と、手袋をはずした後の手洗いや手指消毒は重要です。介護者自身の手が健康でないときは、介護者が感染源になることがあるので、体をふくときや入浴介助をするとき、調理をするときに手袋をすることが必要になります。

物品の個別化

日常生活で共用する物品は多いのですが、感染を予防する目的では、いくつかの物品は個人ごとに専用を使用すべきです。

スタンダードプリコーションの原則通り、血液や汗以外の体液が付着することのある物品はすべて個別化すべきです。歯ブラシ、くし、ヒゲソリは血液が付着する可能性があります。B型肝炎ウイルスやC型肝炎ウイルス、HIVに関しての個別化はこれだけで十分です。

しかし、病原体はそれだけではありませんので、もうすこし個別化すべき物品の範囲は広がります。

ポータブル尿器、ポータブル便器は、長期にわたっての利用者では個人用にする必要があります。再使用するのであれば、漂白剤の成分である次亜塩素酸による消毒が必要です。多剤耐性の細菌が尿器の使い回しから院内感染を起こした例が散見しますので、注意が必要です。

タオル、バスタオルなどのリネン類も個別化すべきと考えられます。疥癬などが感染している場合に伝播を最小限にできますし、場合により、排泄物や分泌物の付着が考えられるからです。

日常の場面で手をふくタオルを共有するのは許されますが、ペーパータオルにするのが無難であると思われます。

洗濯機を共有することは通常問題ないと考えられます。ただし、排泄物が付着すること考えられますので、高温水利用の洗濯機の使用が望ましいと言えます。

トイレやお風呂の共用は一般に問題ないと言えます。褥創のシャワー浴が必要な場合には、分泌物をよく水で洗い流しておく注意はしておきましょう。

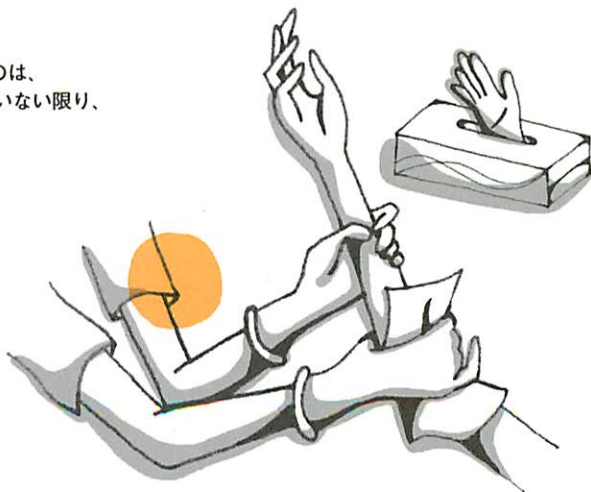
くり返しますが、HIV感染症だけについて考えれば、ポータブル尿器や便器、リネン類の個別化は特に必要ないのですが、一般的な予防策の意味で必要だと考えられます。

HIVを含む血液への対応も日常生活で これだけやればなにも恐れることはない

施設でHIV感染に対する予防として注意しなければならないのは、主に血液感染についてです。唾液や尿や便に血液が混入していない限り、こういったものからのHIV感染は無いからです。

ケガのさいの止血

止血の基本はガーゼ圧迫ですが、介護者が自己防御するポイントは手袋をすることです。だれに対しても行なうスタンダードプリコーションの基本を、そのまま実行するだけです。止血には、手袋をして滅菌ガーゼで傷口を圧迫し、通常の外傷の処置をします。必要があれば、医療機関に運びます。その際、床などに血液が付着した場合にもあわててことはありません。HIVは消毒薬や熱や洗浄などに対する抵抗力がとても弱いウイルスです。床にこぼれた血液は手袋をした上でふき取ればほとんど十分ですが、アルコールでふけば問題ありません。(※1)



針刺し事故

福祉施設での採血は機会が少ないと思われますが、その必要があれば、針刺し事故に対する注意を怠らないようにします。スタンダードプリコーションにのっとり、手袋をして採血をします。

採血後には絶対にリキャップをしないでください。針刺し事故の多くはリキャップをするときに起きています。採血器具から素手で針をはずそうとすることも大変に危険です。まろごと、大きめの針捨てボックスに廃棄してください。

万一、針刺し事故が発生した場合、HIV感染症とB型肝炎については、有効な対策があります。(※2)

血便、吐血、喀血

これらをともなう突発事態は滅多にないことですが、もし起きたら救急車で医療機関に搬送することが必要になる場合が多いと考えられます。施設内での対応では、介護者が目や口の粘膜に血液を浴びないように注意します。ゴーグル付きマスクがあれば、それを着けて対応するのが望ましいのですが、その備えがなければ、手袋をして、血液が多量に噴出する経路に顔を近づけないよう注意して、誤嚥を防止するために患者さんを側臥位にします。そして救急車を待ちます。

生理の介護

生理血にもHIVは含まれますから、その介護では、当然ははじめから手袋を着用します。ナプキンやティッシュはビニール袋に入れて廃棄します。

HIV感染に対する施設での対策は一般的な

スタンダードプリコーションで完全にカバーされています。

つまり、普通のことをやれば、大丈夫! だということなのです。

血液がついたものの処理・消毒

血液がついた器具や洗濯物を扱うさいには、もちろん手袋をしてください。消毒剤は血液などのタンパク質がこびりついているとその中まで入り込むことができないので、まず水道水で水洗いして汚れを落としてから消毒します。

消毒の仕方は、アルコールか1パーセント次亜塩素酸ナトリウム（ブリーチ）で拭き取るか、0.5パーセント次亜塩素酸ナトリウムへ30分間浸漬させることで消毒できます。血液や体液で汚れたごみは手袋をしてビニール袋へ廃棄します。

洗濯の際は、80度、10分間、高温洗濯機を使用することで、ブリーチ以外のほとんどの病原体の感染力をなくすることができます。

高温洗濯機がない場合、すべての病原体に対応するためには0.5パーセント次亜塩素酸ナトリウムへ30分間浸漬させてから洗濯することでも、高温洗濯機と同等の効果をあげることができます。



(※1)

HIVはアルコールで消毒できますが、ノロウイルスやA型肝炎ウイルスなどは、消毒薬に対する抵抗性が強く、アルコール消毒が効きません。

それは、ノロウイルスやA型肝炎ウイルスは一番外側の構造が、鎧のような硬いタンパク質でできたカプシドというものでできているからです。一方、HIVの一番外側は脂質に富んだ膜です。脂質が多い膜は消毒薬ですぐに溶けてしまうので抵抗力は弱く、アルコールでも簡単に消毒できてしまいます。こわもての印象を与えるHIVですが、意外にひ弱なところがあります。

しかし、スタンダードプリコーションでは、HIVよりももう少し抵抗力がつよく、感染力も格段に強いB型肝炎に対する対策を実行することで、ほとんどの病原体を遮断することができます。

具体的には、血液をペーパータオルなどでふき取った後、大量の血液であれば1パーセント次亜塩素酸ナトリウムでふき取るか、0.5パ

ーセント次亜塩素酸ナトリウムへ30分間浸漬させることです。ごく少量の血液汚染であれば、やはりペーパータオルでふき取った後、0.1パーセント次亜塩素酸ナトリウムで清拭するだけでも大丈夫です。

(※2)

その人にHIV感染があることがわかっている場合、針刺しをしてしまった人は、できるだけ早く抗HIV薬の服用を開始します。事故から1、2時間以内に服薬を開始できるのが理想です。早急に医療機関に受診して服薬し、それが無理なときはその人が普段服用している抗HIV薬の1回分を服薬します。いずれにしても患者の受診している医療機関に連絡をとって、その指示に従うのが無難でしょう。同様に、B型肝炎の予防としては、B型肝炎用の免疫グロブリンの投与とB型肝炎ワクチン接種を1、2日の内に受けることです。比較的時間の余裕がありますから、医療機関に受診をしてください。